

吉富友恭	東京学芸大学准教授	私たち人間の自然に対する意識や態度を、国内外に見られる宗教や民俗、風習等の様々な視点からとらえ直し、生物文化多様性について考えます。自然科学、教育、芸術など、各分野で活躍されている専門家の方々からのお話を楽しみにしています。
塚原東吾	神戸大学教授	アニミズムと生物文化多様性について、「近代的合理性」という概念を軸にした、歴史的考察: 教の基層にあるものとして、近代的な合理性や理念化された宗教と対置されたものとして、ある意味でpejorativeな表現として扱われてきた。より劣ったもの、より原始的なものが、ヨーロッパ近代の持つ「優れた」ものに対置され、(劣っていて、無根拠で、原始的で、わけのわからない)、アニミズムによるとされてきた経緯がある。しかし、現実的に、 <b>生物文化多様性は、ある種のアニミズム的な世界観のなかで保持されてきている。生物文化の多様性とアニミズムには親和性が高く(普遍的妥当性や標準化・画一化を標榜する)、近代合理性とは非親和的である。そのため、グローバリゼーションの時代において、生物文化多様性は、まさに近代合理主義の極北にあるパテント(特許)の問題として、争奪戦(バイオ・パイラシーとさえ呼ばれる)の対象となっている。すでにパテントの争奪戦を行う側に、知的・文化的な優位性は全くなく、(政治的・経済的にはもちろん圧倒的に優位である)、醜い戦場の様相を呈している。そのため、このようなバイオ・パイラシーへの参戦を促すことに対抗する戦略として、(同じ土俵で戦う、というのではなく、そもそも、同じ土俵に乗らない戦略をとるために)、アニミズムの立場を意識的にとることが、ある意味では有効ではないのだろうか? <b>近代合理性の限界を超える意識的戦略としてのアニミズム、というのは、また、ある種の「もったいなさ」の発見でもある</b></b>
須田郡司	石研究・写真家	日本各地、世界各地の「石」を巡る中で、これらの石に生物多様性に連なるアニミズムを感じてきました。この感動を共有したいと思います。
なかのまさき	フォトジャーナリスト	近年、日本のサケ増殖事業では、資源の増大を目的に、人工ふ化放流を主体とした魚や川の徹底管理を行ってきた。確かにサケは増えた。しかしそれと引き換えに、古くからの「人とサケの多様なかわり」は失われつつある。
安西英明	野鳥の会研究部長	古今東西、信仰や習わし、お話やアートに登場する鳥たちから、生物多様性とともに関わりあう人類文明のありがたさと危うさを考えてみたい。
宇根豊	農と自然の研究所代表	池の中の鮎は、池の中のことはよく知っているが、池の全容を外から見ることではない。かつて日本語にNatureに当たる言葉がなかった理由である。この池が「自然」にあたる。現代人には池の中の鮎のまなざしが必要ではないか。

川上香	江戸東京博物館学芸員	長野県飯田市上村で現在も継続されている、アワを用いた作占いの事例を中心に発表し、他の地域での神事も取り上げつつ、アワ栽培やアワに寄せる人々の思いを紹介します。
-----	------------	---